

## 前置詞及び不定詞を導く to の検証

早野 勇馬・藤原 隆史・脇淵 良太（信州大学 人文科学研究科修士課程 2 年）  
上條 智緩（学校法人松商学園 秀峰中等教育学校 教諭）

### 1. 導入

英語の to 不定詞はその統語的性質から名詞的用法、形容詞的用法、副詞的用法の三つに大別されることが多い (c.f. 安藤 2005)。また、to 不定詞の意味は、主節で表される出来事よりも「未来」に起こると考えられている (c.f. Duffley 1992, 安藤 2005, Tyler & Evans 2003)。現在の英語教育では、名詞的用法「～すること」形容詞的用法「～するための」副詞的用法「～するために」とし、それ以外の用法は個別に覚えるような手法が一般的である。この段階より一步すすんで、to 不定詞が「未来」を表すと指導する方法でも不十分であると言える。以下の例を参照されたい。(1)は to 不定詞句で表される出来事が、主節で表される出来事よりも後に起こっているとは考えられない例である。

- (1) a. I'm glad to see you.  
b. He must be genius to solve the question.  
c. He is the last person to come here.  
d. The child is quick to learn. (安藤 2005)

本稿では to 不定詞がもつ用法を (i) 到達点で説明できるもの (ii) 到達点で説明できないもの、の二つに分け、法性 (modality)、時制 (tense) を用い、各用法になる条件を特定することで、従来の to 不定詞の研究よりも包括的でかつ説明的で、教育現場に活かせる実用的な分析を提案する。

### 2. 先行研究

先行研究は大きく二つに分類することができる。(1) の例を扱っていない先行研究と (1) の例を扱っている先行研究に分けられる。つまり、前者を 2.1 包括性に問題がある先行研究、後者 2.2 説明の仕方に問題のある先行研究と考える。

## 2. 1 包括性に問題のある先行研究

包括性に問題があるということは、すべての *to* 不定詞の例を学ぶことができないため、教育的効果は低いと考えられる。包括性に問題のある先行研究は Duffley (1992)、井上 (2008)、Quirk et al (1985) があげられる。

### 2. 1. 1 Duffley (1992)

Duffley (1992) では、*to* 不定詞は非現実、つまりまだ実現されていない出来事を想起させるものと定義付けている。

(2) ... the *to infinitive* evokes an event as non-realized or yet to be realized. (ibid: 19)

*to* 不定詞と関係を持つ動詞に注目して、*to* 不定詞の意味を明らかにしている。以下に例を示すこととする。

(3) He tried *to* get free.

(4) I managed *to* get free.

(ibid: 19)

(3)(4)を図示するとそれぞれ図 1、図 2 のように示すことができる。

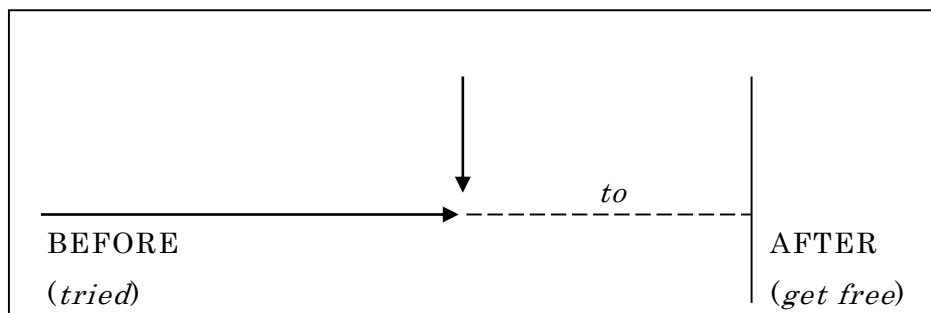


図 1 : *He tried to get free.*

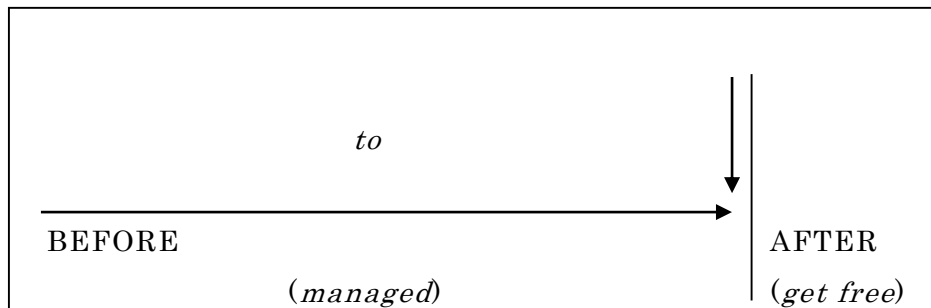


図 2 : *He managed to get free.*

図 1 は *to* 不定詞が未実現なことを表していて、*try* の過程が終わったら *he* は *get free* にな

ることを表している。図 2 は彼が **manage** して to 以下のことが実現されることを表している。

しかし、Duffley (1992) は (1) の例文を扱っていない点で、不十分と言わざるを得ない。

## 2. 1. 2 Quirk et al (1985)

空間的前置詞 to と不定詞の to との間には、メタファー的な関連性がある。以下に例を示す。

- |                                       |           |             |
|---------------------------------------|-----------|-------------|
| (5) John went to the pool.            | 【方向】      |             |
| (6) John went to the pool for a swim. | 【方向 + 目的】 |             |
| (7) John went to swim.                | 【目的】      | (ibid: 687) |

(5) はプールへの方向を表していて、(6) はプールへの方向と泳ぐという目的を表していて、どちらも前置詞 to が用いられている。(7) は目的を表しており、to 不定詞が用いられている。(6) と (7) の例でどちらも【目的】を表している点から、前置詞 to と不定詞 to の間にはメタファー的な関連性があると述べている。

しかし、to 不定詞の例文を包括的な説明をしていない点で、不十分である。

## 2. 1. 3 井上 (2008)

井上 (2008) は前置詞 to が不定詞マーカーとして使われるようになったことへの動機づけを与えている。

- (8) We went to lunch.  
(9) We went to eat lunch.

前置詞 to は本来空間的场所を表すのに用いられていたが、メトニミー的に拡張し、その場所で行う行為を表す名詞を目的語に取ることができるようになる (8)。さらにその場所で行う行為を表す動詞を取るようになり、(9) の表現が言えるようになる。

井上 (2008) は前置詞 to が不定詞として使われるようになったことへの動機づけをしたという点で一石を投じているが、(1) にあるような例文を扱っていない点で不十分であると言わざるを得ない。

## 2. 2 説明の仕方に問題がある先行研究

説明の仕方に問題がある先行研究は安藤 (2005) を挙げることができる。

## 2. 2. 1 安藤 (2005)

安藤 (2005) では、to 不定詞の用法を包括的に扱っている点で他の先行研究より優れているが、用法同士の関連について言及されていない。さらに、感情の原因理由を表す to 不定詞について「過去の事件」と特徴づけている点に問題がある。

(10) In time I came to love her.

(11) I am glad to see you here.

(ibid: 212)

(10) (11) の例文に関する記述が (12) (13) のようにそれぞれ記述されている。

(12) おもに移動や方向性を表す自動詞・形容詞と結びつく。この用法には方向の不定詞 (infinitive of direction) の原義が色濃く残っている。(ibid: 210)

(13) 感情を表す形容詞のあとで用いられ、その感情の生じた原因を述べる。To 不定詞は、未来指向ではなく、「過去の事件」を指している点に注意。(ibid:212)

このように、安藤 (2005) では未来と過去の両方とも to 不定詞で表すことができると特徴づけているが、用法間の基準が示されていないため、学習者にとってはわかりにくいものであると考えられる。

## 3. To 不定詞の分類

本稿では to 不定詞を (i) 到達点で説明できるもの (ii) 到達点で説明できないもの、の二つに分類する。(i) に含まれるものは名詞的用法、副詞的用法の目的・結果、形容詞的用法の先行詞目的語であり、(ii) に分類されるのは、形容詞的用法の先行詞主語、副詞的用法の感情の原因理由・判断の根拠・範囲指定がある。

まず (i) に分類される例文について一つ一つ見ていくこととする。

(14) He wants to be a lawyer.

【名詞的用法】

(15) I came here to speak to you.

【副詞的用法：目的】

(16) He will live to be ninety.

【副詞的用法：結果】

(17) I have some letters to write.

【形容詞的用法：先行詞目的語】

(18) I want something to eat.

【形容詞的用法：先行詞目的語】

(安藤 2005: 210-218)

到達点で説明できるということは、何らかの方向性があると言える。(14) では彼が今後

弁護士になると今思っていることを表している。(14) から (16) の例は本動詞よりも時間的に後で to 以下のことが起こることで説明できる。(17) は「私には書くべき手紙がいくつかある」、(18) は「私は何か食べ物がほしい」となり、話者の気持ちが書く、食べるという方にそれぞれ向いていることを表している。

次に (ii) の例文について考えていく。

- |   |                 |
|---|-----------------|
| (19) a. Tory was the first to recover.    | 【形容詞的用法：先行詞主語】  |
| b. I'm glad to see you here.              | 【副詞的用法：感情の原因理由】 |
| c. She must be mad to dye her hair green. | 【副詞的用法：判断の根拠】   |
| d. The child is quick to learn.           | 【副詞的用法：範囲指定】    |

(安藤 2005: 210-218)

(19) の例は to 以下のことが未来に起こる訳ではない。むしろ to よりも前のことが、to 以下と同時に起こっていると言える。本稿では、Hanazaki (2011) が as の研究に使ったように、到達で説明できないものを Michotte (1963) の解釈モデルを使い説明を試みる。Michotte (1963) では、二つの出来事が同時に起こる時、人間はその出来事の間因果性を見出すことを提唱している。このように考えると (19a) は回復するのと初めての人になるのは同時であり、(19b) はあなたに会うのと嬉しいのは同時であるということが言える。また、私が嬉しいという結果に至ったのは、あなたに会ったという要因があるためとも言える。(19c) は彼女が髪の毛を緑に染めたのを見たことと彼女が狂ったという判断を下す時は同時であると考えられる。また、彼女が狂ったという判断を下す結果に至ったのは、彼女が髪を緑に染めたという原因があるためとも言える。(19d) は子供が学んでいるのを見て、早いという判断を下していると考えられる。

以上のように、to 不定詞を (i) 到達点で説明できるもの (ii) 到達点で説明できないものに分け、(i) については、to 不定詞が表す法性と時制について説明し、(ii) については to の前後の出来事が同時であるために、因果な解釈があることを Michotte (1963) の解釈モデルを用い説明した。

本稿ではさらに、to 不定詞の各用法になる条件を導きだすことに成功した。その条件を図 3 のようにまとめることができる。

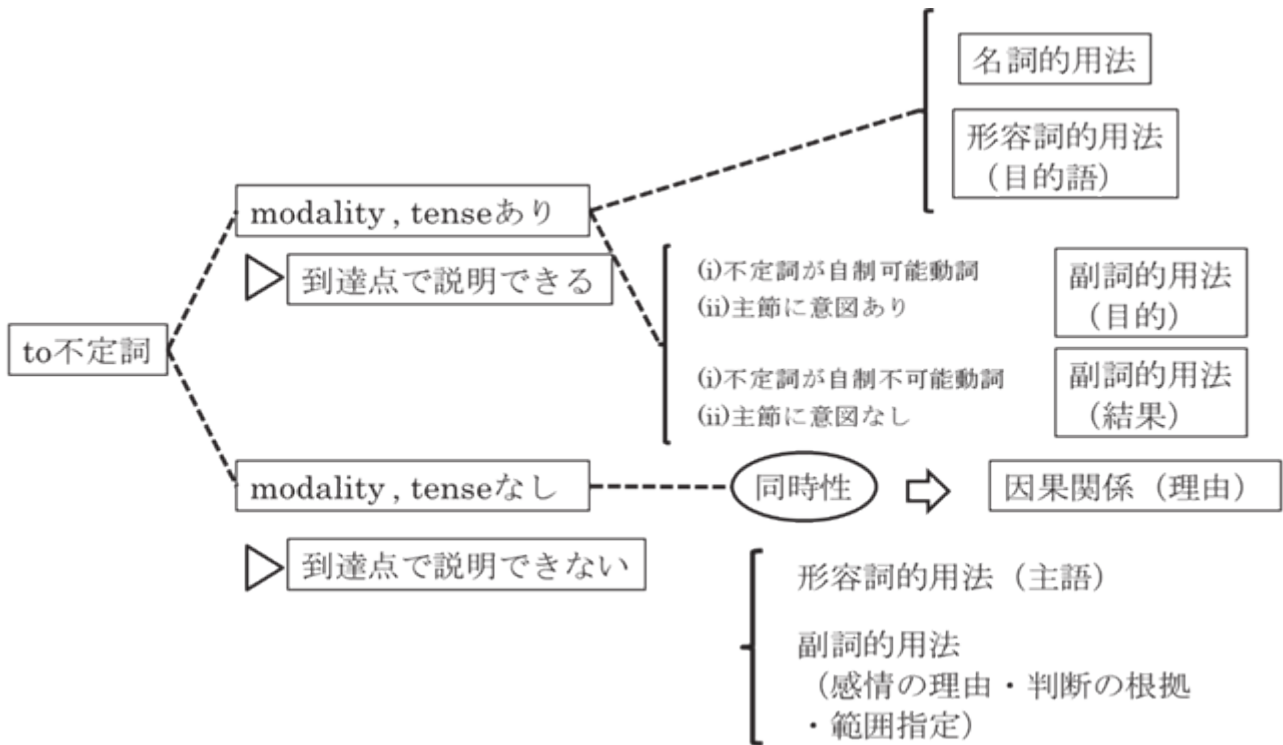


図3：to不定詞の用法誘導条件

図3は本稿でのto不定詞の用法誘導条件を視覚的に明らかにしたものである。to不定詞は到達点で説明できるものと説明できないものに分けることができる。

到達点で説明できるものは tense, modality があるといえるものである。tense を使うことで名詞的用法 (He wants to be a lawyer.) を、modality を使うことで形容詞的用法先行詞目的語 (I have some letters to write.) をそれぞれ説明することができる。さらに、不定詞の動詞の自制可能性と主節で表される出来事の意図性の有無によって、副詞的用法目的 (I came here to speak to you.) と副詞的用法結果 (He will live to be ninety.) を説明することができる。不定詞の動詞が自制可能で、主節に意図がある場合、副詞的用法目的になり、不定詞の動詞が自制不可能で、主節に意図がない場合、副詞的用法結果になる。

到達点で説明できないものは本稿で最も主張したい部分であるが、modality, tense が無いもので、全て同時性で説明することができる。つまり、to の前と後で因果関係があると言え、形容詞的用法先行詞主語 (Tory was the first to recover.)、副詞的用法感情の原因理由 (I'm glad to see you here.)、副詞的用法判断の根拠 (She must be mad to dye her hair green.)、副詞的用法の範囲指定 (The child is quick to learn.) という先行研究では説明できない用法を説明することができる。

#### 4. 結論

本稿では to 不定詞の用法を到達点で説明できるものと到達点で説明できないものの二つに分けて説明を行った。この説明は二つの点で教育的効果があると考えられる。一つ目は「学習者の記憶の負担減」、二つ目は「基準の明確化」がある。前者の「学習者の記憶の負担減」については、本説明では例外として用法を暗記する必要がないため、全く動機づけもないまま暗記せざるを得ない状況を解消し、学習効率があがると考えられる。多くの事項を覚えなければならない学習者にとって、少しでも暗記という作業ではなく、関連付けによって記憶にとどめる事ができればこれほど助けになることはない考える。後者の「基準の明確化」については、従来の教え方では単に例外扱いされていた事項に対しても一貫した説明をし、用法間の明確な基準を設けることにより、学習者にとって記憶にとどめる際の助けになると考えられる。さらに、このような基準を設けることにより、学習者が自分で文を産み出す際にも to 不定詞に関連する事項が助けとなると考えられる。以上の二点から本分析は現在の to 不定詞の指導に対し、提言を行う事ができたと考えられる。

本研究が学習者の一助となることを願ってやまない。

#### — 参考文献 —

安藤貞雄 (2005) 『現代英文法講義』 開拓社.

Duffley, Patrick J. (1992) *The English Infinitive*. Longman Publishing, New York.

井上朋子 (2008) 『前置詞 to から to 不定詞への文法化』 常葉学園 大学研究紀要第 24 号 81～100.

花崎美紀 (2011) 「間主観性の視点からみる As の意味論」『言語の間主観性：認知—文化の多様な姿を探る』 武黒麻紀子編. 早稲田大学出版部. 19-40.

Michotte, A. (1963) *The Perception of Causality*. (trans. T. R. Miles & E. Miles). New York: Basic Books.

Quirk, R. S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. Longman Ink, New York.

Tyler, A and V Evans. (2003) *The semantics of English Prepositions: Spatial Scene, Embodied Meaning, and Cognition*, Cambridge University Press: Cambridge.